

ぼくの間人帖

森本毅郎



新潮文

にんげんてち
ぼくの人間手帖

新潮文庫

も - 10 - 1



昭和六十二年七月十五日 印刷
昭和六十二年七月二十五日 発行

著者 森本毅郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六―五一一
編集部(〇三)二六六―五四四〇
振替 東京四一八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・東洋印刷株式会社 製本・株式会社植木製本所

© Takerô Morimoto 1984 Printed in Japan

ISBN4-10-103711-6 C0195

新 潮 文 庫

ぼくの間手帖

森 本 毅 郎 著

新 潮 社 版

3880

目次

1 画面に出なかった“ニュースワイド”……………九

NHKを去った日 「朝が変わった」

あなたへのメッセージ ぼくを支えてくれた人々

一週間の背広 ぼくの方法

朝のキャッチボール 四時の目ざめ

男が転職を考える時

2 ぼくのインタビューノート……………五

たった一度の出逢いでも

教えることは学ぶこと——斎藤秀雄

“核”にふれる難しさ——中里恒子

ハプニングの陰で——武者小路実篤

女性の知性と感性——田地文子

寅さんが世を去る日——山田洋次

3 ちよつと楽しい、いい話……………一九

経験の重み——森有正

一期一会——草野心平

こわいユーモア——開高健

生地に根をおろして——飯田龍太

脱都会派の二人——丸山健二と中上健次

小さん囁——柳家小さん

命なりけり——山本健吉

4 長距離ランナーからのメッセーじ……………二七

学校へ行かなくてよかった——中川一政

くよくよする暇がない——宇野千代

真理は生命——住井すゑ

5 自分の言葉を求めて……………二〇三

読むことの意味 記者かアナウンサーか

「話しことば」流行のなかで

文庫版あとがき……………三七

解説 村松友視

ぼくの人間手帖

1

画面に出なかった“ニュースワイド”

NHKを去った日

『願により職を解く』

五十九年の三月一日、私はNHKからの辞令を受け取った。その日私は二十一年間のNHK生活に別れを告げた。

私はアナウンサーの部屋に^{もと}戻り、自分の荷物をダンボールの箱に詰めた。机の上に積んでいた本や資料をまとめるとダンボールは三個になった。

「宅配便で送れば家の戸口まで運んでくれますよ」

私が自分の車に乗せて帰ろうとしているのを知った同僚の一人が教えてくれた。

「それはいいね、こんな大きな荷物を自分で運んでいたら目立って仕方がない」

私はすぐに彼のアイディアにのり、庶務に手続きを頼んだ。身軽になった私は誰^{だれ}も注意を払っていないときを見計らって部屋を出た。放送センターの玄関で受付嬢にさようならをいってふらりと外に出たとき、自分が少々気負っているのを感じて苦笑した。誰にも気付かれず、ポケットに手をつ突っ込んで何気なく去る、そんな風に辞めていくのはいかにも格好をつけているようで恥かしかったのである。

人事部へあいさつに立ち寄ったとき思いがけず餞別^{せんべつ}にネクタイをもらって涙がこぼれた。仕事仲間に会ってこれ以上の涙はみつともない。それならこの程度の気取りの方がまだ我慢出来るなと私は駐車場に向いながら自分にいい聞かせていた。

「NHK生活二十年、今年私は四十五歳、ニュースワイドも交代の年、そうした人生の節目でもう一度自分の環境をがらりと変えてみたかった。ささやかな冒険です」

前日の二月二十九日、記者会見でNHKを辞める理由を私はこう説明した。

その日、私はそれまで四年続けてきた「ニュースワイド」の放送の中でNHKを辞めるといった。唐突だったから見ていた人たちからは問合せも入ったし、新聞や雑誌の記者もNHKに説明を求めた。その日のうちに私は記者会見をするはめになったのである。私はさまざまな質問をうけた。

「どうしてやめるのか」

「NHKに不満があるのか」

「民放へ行くのか」

「契約金はいくらか」

我が家に向って車を走らせながら、私はその記者会見のときのことを思い返していた。結局のところ、何故^{なぜ}こんな風になったのか自分でもよくわからないと私は思った。たしかに節目に来ていたのは事実だし、NHKという大きな組織に対する私なりの複雑な思いもあった。

そんな折にタイミングよくTBSから誘いが来た。しかし二十年勤めて来たNHKを辞めるという決心を促したものが本当は何なのかと考えると、実のところはつきりこれだとい切れるものは自分でも掴み切れない。ともかく時計の振子が急に大きく振れ出したのだ。この振子が元に戻らないうちに踏み出さなければ結局は新しい生活は始まらない、思い切れ、やめると口に出せ、そう私を急ぎ立てるもう一人の私がいたような気がする。

我が家には誰もいなかった。子供たちが学校から帰ってくるまでにはまだ間があつたし、女房は買物にでも出かけているらしかった。冷えた部屋に暖房を入れ、ソファに坐り込んだとき私ははじめて疲れを覚えた。

とうとう辞めてしまったと私は心の中でつぶやいた。

予定通りにいけば私が「ニュースワイド」のキャスターを交代するのは三月末のはずだった。四月からは社会部の曾我記者が私のあとを引き継ぐことも決り、私はあと何日と指折り数えていた。

「オリンピックまであと何日、キャスター交代まであと何日なんて画面の横に看板でも出したら」

とスタッフは私をからかい、私も番組をおりた後はどんな気分だろうなどとあれこれ空想しては楽しんでた。その頃は自分がこんなに早くNHKを辞めることになるとは思って

みなかった。

それが二月に入って、ばたばたと身のまわりに変化がおり、一度決心するとあとはフィルムフィルムの早送りのように事は進んでしまった。私は予定より一月も早く番組を交代し、次の日にはもうNHKの人間でもなくなっていたのである。

四月中旬からTBSの仕事に入ることになった私には突然一ヶ月半の空白が訪れた。三月に中学を卒業し四月に高校に進むまでの間の春休みが、中学生でも高校生でもない宙ぶらりんな感じになると同様の気持を私は久しぶりに味わった。それはどこにも縛られない自由さと、全く一人である頼りなさの入り混った不思議な気分だった。

程なく宅配便でダンボール箱が届いた。雑然と押し込んであった一つ一つを私は取り出しでは整理した。「ニュースワイド」の予定表や大河ドラマ「草燃える」の台本に混って、つめ切りやビタミンCの缶かん、半分減ったヘアトニックも出て来た。「女性手帳」を担当していた時代に出演者と写したスナップ写真、長髪はけしからんという視聴者からの投書、古い手帖ちようや作者から贈られたサイン入りの本……。

ふと気が付くと、私は整理する手を休めては手帖をめくったり、写真をつくづくとながめたりしているのだった。地方局暮し九年、東京で十二年、ふり返ってみればいろいろなことがあった。私はダンボール箱の前に坐り込んだまま、これまでのことをとりとめもなく思い出していた。

「朝が変わった」

私がNHKの朝の「ニュースワイド」のキャスターをつとめることになったのは、五十五年の四月からである。その年、NHKとしては朝を変えることが最大の課題で、それまで十五年続いて来た「スタジオ〇二」とニュースを一緒にした大型ニュース番組をスタートさせることになった。

「時計がわり」などと陰口をたたかれながら、各局と比べてみれば群を抜いて高い視聴率を維持している朝の編成を変えるのは実のところ大きな冒険だった。視聴率が下れば、だから変えることはなかったと批判されるし、視聴者の幅広い要求に^{こた}える番組を作るのはなかなかの難事業なのである。にもかかわらずNHKはその冒険に乗り出した。

さまざまな人々が一日の活動を開始する朝は三十分単位で見る人が変わる。七時前後は出勤の早いサラリーマン、八時前後は夫や子供を送り出した主婦が中心……。そうした人々に、前夜から朝にかけて内外で起きた大きな世の中の動きを三十分単位でくり返しながら味つけを変えて伝えてゆく。天気予報、スポーツの結果、各地のトピックス、ニュースの主役へのインタビュー、文芸、芸能の活動と硬軟各種の情報をコンパクトに詰めた「ニュースのデパ

ート」である。

NHKの報道の各部門が総力をあげるこの番組のキャスターに、私が選ばれるとはほとんどの人が予想していなかった。

「まあ、いつてみれば万馬券だね」

と私に向ってあからさまにいう人もいた。もちろん私自身にとってもそれは青天の霹靂であつた。私は半年前にアナウンサーの現役を退き、当時「ニュースワイド」のキャスターを誰にするか検討するデスクの立場にあつたのである。キャスターの人選は難航した。アナウンス室の推す候補に報道局は難色を示し、タイムリミットは迫っていた。ある日私はアナウンス室長に呼び出され「お前がやれ」といい渡されたのである。私はそれまで報道番組にはあまりかかわりがなかったし、果してそんな大役がつとまるだろうかと不安だつた。

しかし番組がスタートすると、私の逡巡などおかまいなく「アメリカのイラン大使館人質救出作戦失敗」「大平首相の急死と衆参同時選挙」「レーガン大統領狙撃事件」「スペースシャトルの帰還」……と次々に大ニュースがとび込んだ。まさに朝の「ニュースワイド」は、その時間の中に世界の歴史が動いているといつてもよかつた。圧倒的な量でおし寄せせる情報の波をまともにかぶりながら、私はその波におし流されまいと必死になっていた。

「朝が変わつたという強烈なパンチが必要なんだ。モリさん、スピードアップだよ。思い切つ